

〈論文〉

看護学生のがん患者に対するイメージと影響する背景 － 大学生と養成校生のアンケート調査 －

小野 善昭、池田 正子

Student nurse perceptions of cancer patients and influences on them.
－ A questionnaire survey of university and college nursing students －

Yoshiaki ONO, Masako IKEDA

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

In order to clarify perceptions of cancer patients among nursing students and to better understand how such perceptions are shaped, we surveyed 134 nursing students enrolled in either a 3-year nursing school or a 4-year university program and compared the images of cancer patients held by students with their interest and past experience in cancer care. Results, as follow, were tabulated and compared between cohorts grouped by year.

1. 70% of students had no prior experience with cancer patient care while 80% of students expressed an interest in cancer nursing.
- 2) The perception of cancer patients was negative in 8 out of 15 items. Second-year students responded negatively to four more items than did first-year students.
- 3) Overall, second-year students had a significantly negative image of cancer patients.

If students view cancer patients negatively, it can be expected to give rise to uncertainty, confusion and conflict in their relations with patients. Therefore it is important for teachers to re-evaluate awareness education practices so that they contribute to the formation of more positive images, to be more sensitive to signs of distress from students during their nursing practicums, and to support students in their efforts to relate more independently with patients.

看護学生のがん患者に対するイメージと影響する背景を明らかにする目的で、平成19年度に在学中の看護大学生と3年制看護師養成学校生、計134名を対象として、がん看護に関する経験や関心とがん患者のイメージを解析した。さらに、教育進度の違う学年間で検討し以下の結果を得た。1. 学生の7割はがん患者の看護や介護の経験がなく、学生の8割はがん看護への関心があると答えていた。2. がん患者のイメージは、否定的であると答えた項目が15項目中8項目であった。2年生の否定的項目は1年生よりも4項目多かった。3. イメージ合計点は、2年生が有意に低く否定的イメージを持っていた。以上のことから、学生ががん患者に否定的イメージを持っていると患者とのかかわりに悩みや葛藤、戸惑いを生ずると予想された。そのため、肯定的イメージに変化する知識教授内容の検討、臨地実習で苦悩する学生を察知し、主体的に患者と関われる様に支え、指導していくことが重要である。

キーワード：看護学生、がん患者、イメージ、がん看護教育

I. 緒言

がん対策基本法が2007年4月より施行され、国を挙げてがん患者の減少あるいはがん死による死亡の減少に着手することになった。そのため、看護職としてがん患者に携わることになる看護学生へのがん看護教育にも力を入れる必要がある。

看護基礎教育では主に成人看護学で、がん看護がとりあげられていることが多い。塚本ら¹⁾は、看護学生のがんに対する態度について、イコール「死」、「恐ろしい」病気というイメージが根強く構造化され、その要因として、「親族におけるがん闘病体験と闘病に伴う家族の変化」や「看護の学習と体験」など多種多様な変数があることを明らかにしている。また、杉谷ら²⁾は、看護学生のがんイメージは否定的傾向を示すが、肯定的がんイメージは、知識を得ること、患者との関わり体験、関わりによる肯定的体験などと関連があることから、がん看護教育は重要であると述べている。さらに沼沢ら³⁾は看護学生ががん患者に対し、否定的なイメージを持っていたが、講義を受けたことで、肯定的なイメージに変化していったことを明らかにしている。さらに、学生のがんへのイメージを大切にしながら、がんが治癒可能なあるいは慢性の疾患であること、生命の質の向上を目指す看護を理解することが学習の主題であることを示唆している。

先行文献で述べられているように、がん患者・看護についてのイメージに影響を与える要因として基礎教育における講義や臨地実習があげられるとすれば、本学においても今後、学習方法の検討の必要があると考える。そこで、看護学生のがん看護に関する経験や関心並びにがん患者に抱くイメージをアンケート調査より明らかにする。さらに、教育進度の違う学年間での比較からがん看護への関心とイメージの違いを知ることで、講義・実習の影響を明らかにするとともに今後の教育内容・方法の検討の資料としたい。

II. 研究目的

- ・看護学生のがん看護に関する経験や関心並びにがん患者に抱くイメージをアンケート調査より明らかにする。
- ・教育進度の違う学年間での比較をおこないがん看護への関心とイメージの違いを明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究対象

平成19年度に、本学に在学している看護大学生（以下、大学生とする）103名（1年生：54名、2年生：49名）と3年制看護師養成学校生（以下、養成校生とする）46名（1年生：23名、2年生：23名）。

2. 調査期間

平成19年度の実習終了後、平成19年12月から平成20年2月の間にアンケート調査をおこなった。

3. データ収集内容と方法

1) 調査項目

- ①属性について（年齢、性別、所属教育機関、学年、身近な人のがん死の有無、身近な人のがん治療の経験の有無、がん患者の看護や介護の経験の有無）
- ②がん看護への関心について（関心の有無、実習で受持つ希望の有無、将来がん看護に携わりたいか否か）
- ③がん患者のイメージについて

イメージの測定には犬童⁴⁾が作成したがんイメージスケールを参考にして、SD法（Semantic Differential method）を用いて、15項目の形容詞対を設定した。否定的形容詞から肯定的形容詞の間を5段階 {1. 非常に（否定的と言える） 2. かなり（否定的と言える） 3. どちらとも言えない 4. かなり（肯定的と言える） 5. 非常に（肯定的と言える）} の選択肢を設け、回答を点数化した。なお、回答項目の1.と2.を回答したものを否定的イメージ、4.と5.を回答したものを肯定的イメージとした。

2) データ回収方法

大学生については研究者が研究目的、方法について説明し、調査用紙を配付した。回答は、個人が特定されないよう封筒にいれ、研究室前に設置したボックスに投函してもらった。養成校生について

は当該校の教員に研究の説明文書と質問紙の配付及び学生個人が回答用紙を封筒に入れたものの回収を依頼し、回収後郵送してもらった。

4. 分析方法

項目ごとに単純集計後、学年ごとにクロス集計し、学年間の比較をおこなった。また、がん患者イメージの回答に欠損や不備のあるものは集計から除外した。

身近な人のがん死や治療の経験・がん患者との関わり・がん看護への関心や興味など非数値型変数の項目については、クロス集計後カイ二乗検定をおこなった。また、がん患者のイメージについては各項目の比較にはMann-WhitneyのU検定をおこない、イメージ合計点についてはt検定をおこなった。なお集計と検定にはPASW Statistics 17.0を使用し、いずれの検定も有意水準は5%とした。

5. 倫理的配慮

研究目的、方法について説明するとともにプライバシーの保護、研究協力の可否による不利益を被ることはないこと、データは研究目的以外に使用しないこと、研究終了後破棄することを説明し、同意を得られた学生に対しておこなった。調査用紙の返送を持って同意を得たこととみなした。

IV. 結果

大学生、養成校生の1、2年生149名を対象にアンケートを実施して134名からの有効回答を得た(89.9%)。内訳は大学生94名(1年生52名、2年生42名)、養成校生40名(1年生21名、2年生19名)であった。

1. 属性とがん看護への関心について(表1参照)

1) 身近な人のがん死経験の有無

58名(43.3%)が身近な人のがん死の経験ありと答え、76名(56.7%)が経験なしと答えた。

1年生の29名(39.7%)が身近な人のがん死の経験ありと答え、44名(60.3%)が経験なしと答えた。2年生の29名(47.5%)が身近な人のがん死の経験ありと答え、32名(52.5%)が経験なしと答えた。

2) 身近な人のがん治療経験の有無

62名(46.3%)が身近な人にがん治療の経験ありと答え、71名(53.0%)が経験なしと答えていた。

1名(0.7%)は無回答であった。

1年生の32名(43.8%)が身近な人にがん治療の経験ありと答え、40名(54.8%)が経験なしと答えていた。1名(1.4%)は無回答であった。2年生の30名(49.2%)が身近な人にがん治療の経験ありと答え、31名(50.8%)が経験なしと答えていた。

3) がん患者の看護あるいは介護の経験の有無

36名(26.9%)はがん患者の看護あるいは介護の経験ありと答え、96名(71.6%)が経験なしと答えていた。2名(1.5%)が無回答であった。

1年生の17名(23.3%)はがん患者の看護あるいは介護の経験ありと答え、55名(75.3%)が経験なしと答えていた。1名(1.4%)が無回答であった。2年生の19名(31.1%)はがん患者の看護あるいは介護の経験ありと答え、41名(67.2%)が経験なしと答えていた。1名(1.6%)が無回答であった。

4) がん看護への関心の有無

113名(84.3%)はがん看護への関心があると答え、17名(12.7%)は関心がないと答えていた。4名(3.0%)は無回答であった。

1年生の58名(79.5%)はがん看護への関心があると答え、13名(17.8%)は関心がないと答えていた。2名(2.7%)は無回答であった。2年生の55名(90.2%)はがん看護への関心があると答え、4名(6.5%)は関心がないと答えていた。2名(3.3%)は無回答であった。

5) 実習におけるがん患者受け持ち希望の有無

68名 (50.7%) が実習でがん患者を受け持ってみたいと答え、56名 (41.8%) が受け持ってみたくないと答えていた。10名 (7.5%) は無回答であった。

1年生の32名 (43.8%) が実習でがん患者の受け持ちを希望し、34名 (46.6%) が受け持ちを希望しないと答えていた。7名 (9.6%) は無回答であった。2年生の36名 (59.0%) が実習でがん患者の受け持ちを希望し、22名 (36.1%) が受け持ちを希望しないと答えていた。3名 (4.9%) は無回答であった。

6) がん看護に携わりたいか否か

80名 (59.7%) が将来がん患者の看護に携わりたいと答え、45名 (33.6%) が携わりたくないと答えた。9名 (6.7%) は無回答であった。

1年生の37名 (50.7%) が将来がん患者の看護に携わりたいと答え、29名 (39.7%) が携わりたくないと答えていた。7名 (9.6%) は無回答であった。2年生の43名 (70.5%) が将来がん患者の看護に携わりたいと答え、16名 (26.2%) が携わりたくないと答えていた。2名 (3.3%) は無回答であった。

2. がん患者のイメージについて

15項目中、50%以上が否定的イメージであると答えた項目は、「悲観－楽観」(70.9%)、「不安定－安定」(73.1%)、「寂しい－にぎやか」(56.7%)、「苦しい－安らか」(87.3%)、「絶望－希望」(65.7%)、「残酷－恵み」(61.2%)、「死－生命」(73.1%)、「虚無－充実」(52.2%) の8項目であった (図1参照)。イメージ合計点は 35.3 ± 8.7 点であった。

1年生で、15項目中、50%以上が否定的イメージであると答えた項目は、「悲観－楽観」(65.8%)、「不安定－安定」(71.2%)、「寂しい－にぎやか」(54.8%)、「苦しい－安らか」(89.0%)、「絶望－希望」(64.4%)、「残酷－恵み」(52.1%)、「死－生命」(68.5%) の7項目であった (図2参照)。イメージ合計点は 36.9 ± 7.8 点であった。

2年生で、15項目中、50%以上が否定的イメージであると答えた項目は、「恐い－恐くない」(55.7%)、「悲観－楽観」(77.1%)、「不安定－安定」(75.4%)、「寂しい－にぎやか」(59.0%)、「厳しい－優しい」(55.7%)、「苦しい－安らか」(85.3%)、「絶望－希望」(67.2%)、「残酷－恵み」(72.1%)、「死－生命」(78.7%)、「激しい－穏やか」(54.1%)、「虚無－充実」(55.7%) の11項目であった (図2参照)。イメージ合計点は 33.4 ± 9.3 点であった。

3. 学年間の比較

カイ二乗検定結果、<がん看護への関心の有無>、<身近な人のがん死経験の有無>、<身近な人のがん治療経験の有無>、<がん患者の看護あるいは介護の経験の有無>、<実習におけるがん患者受け持ち希望の有無>、<がん看護に携わりたいか否か>すべての項目で有意差は見られなかった。

Mann-WhitneyのU検定の結果、がん患者のイメージの「恐い－恐くない」、「嫌悪感－好感」、「悲観－楽観」、「残酷－恵み」「激しい－穏やか」の5項目で1年生に比べて2年生が有意に否定的イメージであった ($p < 0.05$)。

イメージの回答を得点化し合計点をt検定にて学年間で比較したところ、1年生に比べて2年生のイメージ合計得点が優位に低かった ($P = 0.031$)。

V. 考察

1. がん患者のイメージに影響を与える要因

わが国の死因の第1位は、悪性新生物であり、罹患数も年々増加の一途をたどっている。がん看護は、必ずしもがん専門病棟やホスピス病棟で行われている訳ではなく、学生が実習においてがん患者を受け持つ機会が多いといえる。本研究において、全学生のうち、がん看護や介護の経験が2割ほどである反面、身近な人のがん死や治療の経験があるものが半数近くであった。従って1、2年生は、実習などではがん患者と直接的な関わりが多くなく、身近な人のがん死や治療の経験を目の当たりにして「がん患

者のイメージ」としていると考える。

がん看護への関心は、全体で8割の学生は興味があると述べていた。1年生では8割弱であった関心が2年生では9割と高かった。また、将来がん看護に従事する希望も1年生では5割程度であったのが2年生では7割と高かった。これらは、実習で少ないながらもがん患者を受け持ったこと、講義でがん看護や患者について学ぶこと、さらにマスメディアなどでがん看護についての情報が流れていることなど種々の要因により、がん看護への関心やがん看護従事希望が高まっていると推察される。しかし、実習でがん患者を受け持つ希望は全体、各学年を通して5割前後であり、現時点でがん患者と関わり、看護過程を展開していく事の困難さを感じていると考える。これは、学年を経ることでがんへの知識や情報が増え、がん看護に対しての関心やがん看護への従事希望は高まるが、身近な人の死や治療を目の当たりにしていることで、「本当にがん看護ができるのだろうか」という思いが払しょくされず、実際に実習での受け持ちや将来がん看護することは難しいのではないかという思いにつながっていったと考えられる。

2. 学生が抱くがん患者のイメージ

学生のがん患者のイメージは15項目中8項目が否定的イメージであった。さらに、1年生の否定的イメージが7項目であるのに対し、2年生は11項目と多かった。犬童⁴⁾は看護者のがんに対するイメージは否定的な傾向があるとし、杉谷ら^{2) 5)}や沼沢ら³⁾は看護学生のがんイメージやがん患者のイメージを15個の形容詞対によって調査した結果、看護学生はがんやがん患者に対して否定的なイメージを持っていることが明らかとなっている。本調査においても看護学生全体の特徴としてがん患者に対し否定的なイメージを持っていることが明らかとなった。犬童は看護者のがんに対し否定的イメージを持っていると「看護者が患者と病気について語ったり、ケア行動を起こす上でマイナス要因となり、看取りやケア不安に影響するものと考えられる」⁴⁾と述べている。そのため、看護学教育において、学生が持つがんやがん患者のイメージが肯定的になる働きかけが必要である。

杉谷ら⁵⁾の調査ではがん患者とのかかわり体験がない学生は否定的イメージとなっており、がん患者あるいは家族とのかかわり体験があることで肯定的なイメージを持つことを明らかにしている。また、沼沢ら³⁾は看護学生に対しがん看護学の講義の前後でがん患者のイメージを調査し、講義後には否定的なイメージが肯定的に傾いたことを明らかにし、山本ら⁶⁾は看護学生に対しがんに対するイメージと影響要因を調査した結果、知識のある学生や実習でがん患者を受け持った学生はがんイメージが肯定的に変化していることを明らかにしている。

このように先行研究では知識の教授やがん患者との直接的なかかわりによってイメージが肯定化することが明らかにされているが、本調査では1年生が7項目について否定的イメージであったのに対し、2年生は11項目が否定的イメージであった。さらに学年間の比較において5項目が有意に否定的イメージとなっていた。これは、本調査対象の学生が1年生、2年生であり、多くの学生ががん看護について詳細な講義を受けていなく、がん患者の受け持ちや身近な人の介護経験がすくないことが違いとして推察される。そのため、沼沢らが、学生には「従来の学習内容のがん治療や終末期の看護に加えて、がんが治癒可能なあるいは慢性の疾患であること生命の質の向上を目指す看護を理解することが学習の主題である」³⁾と示唆しているように、学生に対し、単なるがん治療や看護の知識や技術を教授するだけでなく、がんを罹患しながらも生きている患者を支えていくような教育が必要であると考えられる。さらに、直接的なかかわり体験によってがんやがん患者へのイメージが肯定的に変化していくために学生が患者と良いかかわりが築けるように援助することや患者とのかかわり体験を今後生かしていける様にサポートしていく必要があると考える。

近年の死亡原因の第1位は悪性新生物が占めており、がんを罹患し入院している患者は多数存在する。そのため、必然的に学生が臨地実習においてがん患者を受け持つ機会が多くなる。看護師ががんやがん患者に対し否定的イメージを持っているとケアやかかわりにおいてマイナス要因となり、学生において

も否定的イメージを持っていることでがん患者とのかかわりに悩みや葛藤、戸惑いを生ずることが予想される⁷⁻¹⁰⁾。本調査対象の学生はがん患者に否定的なイメージを持っており、実習でがん患者の受け持ちを希望するものは決して多くない。しかし、がん看護への関心は高い。これはかかわっていくことの困難を感じながらも否定的なイメージであろうがん患者をどうにかして支えていきたいという現れであると考えられる。そのため、今後学生のがんやがん患者へのイメージが肯定的に変化するような知識教授の具体的な内容を検討していく事、臨地実習において学生ががん患者を受け持つときに悩み、葛藤し戸惑いながら苦悩する学生を察知し、主体的に患者と関わっていける様に支え、指導していくことが大切であることが示唆された。今後、教育内容や実習でのかかわりを検討していくために、縦断的ながん患者イメージについて調査していく必要がある。

VI. 結論

- ・看護学生の7割はがん患者の看護や介護の経験がなかったが、がん看護への関心は8割の学生があると答えていた。
- ・がん患者のイメージでは、否定的であると答えた項目が15項目中8項目であった。1年生は否定的項目が7項目であったが2年生は11項目と多かった。
- ・イメージ合計点を学年間で比較すると、2年生が有意に低く、否定的イメージを持っていた。

引用・参考文献

- 1) 塚本康子・奥祥子・伊東志乃・牛尾禮子、看護学生のがんに対する態度構造、日本看護学教育学会誌、12巻学術集会講演集、85、2002。
- 2) 杉谷かずみ・犬童幹子、看護学生のがんイメージと教育的役割、日本がん看護学会誌、17巻Suppl、99、2003。
- 3) 沼沢さとみ・山田皓子・齋藤亮子・井上京子、看護学生が描くがん患者のイメージ、日本がん看護学会誌、19巻Suppl、166、2005。
- 4) 犬童幹子、看護者のメンタルヘルスに関する研究－がん看護に伴う看護者の不安に関する因果モデルの検証と再構築－、日本看護科学会誌、22巻1号、1-12、2002。
- 5) 杉谷かずみ・犬童幹子・松本貴彦、看護学生のがんイメージと教師の役割、大阪府立看護大学医療技術短期大学部紀要、9巻、27-33、2004。
- 6) 山本晴実・木村愛・名越恵美、看護学生のがんイメージと影響要因の分析、日本緩和医療学会学術大会プログラム・講演抄録集、13巻、282、2008。
- 7) 畑中あかね・勝間みどり・林裕美・西川千歳、がん患者を受け持つ学生の実習指導（第1報）－がん看護、がん告知に関する学生の学びの現状－、神戸市看護大学短期大学部紀要、16号、127-139、1997。
- 8) 林裕美・畑中あかね・勝間みどり・西川千歳、がん患者を受け持つ学生の実習指導（第2報）－臨地実習における看護学生の不安・ストレスに関する研究事例の検討－、神戸市看護大学短期大学部紀要、17号、103-113、1998。
- 9) 畑中あかね・林裕美・勝間みどり、がん患者を受け持つ学生の実習指導（第3報）－臨地実習における学生のがん看護に対する不安・ストレス感情と教員の関わりについての検討－、神戸市看護大学短期大学部紀要、18号、73-84、1999。
- 10) 岩瀬恵美・茶園美香・高橋晴美、終末期看護実習における学生の戸惑いと対処の実態、日本がん看護学会誌、18巻Suppl、85、2004。

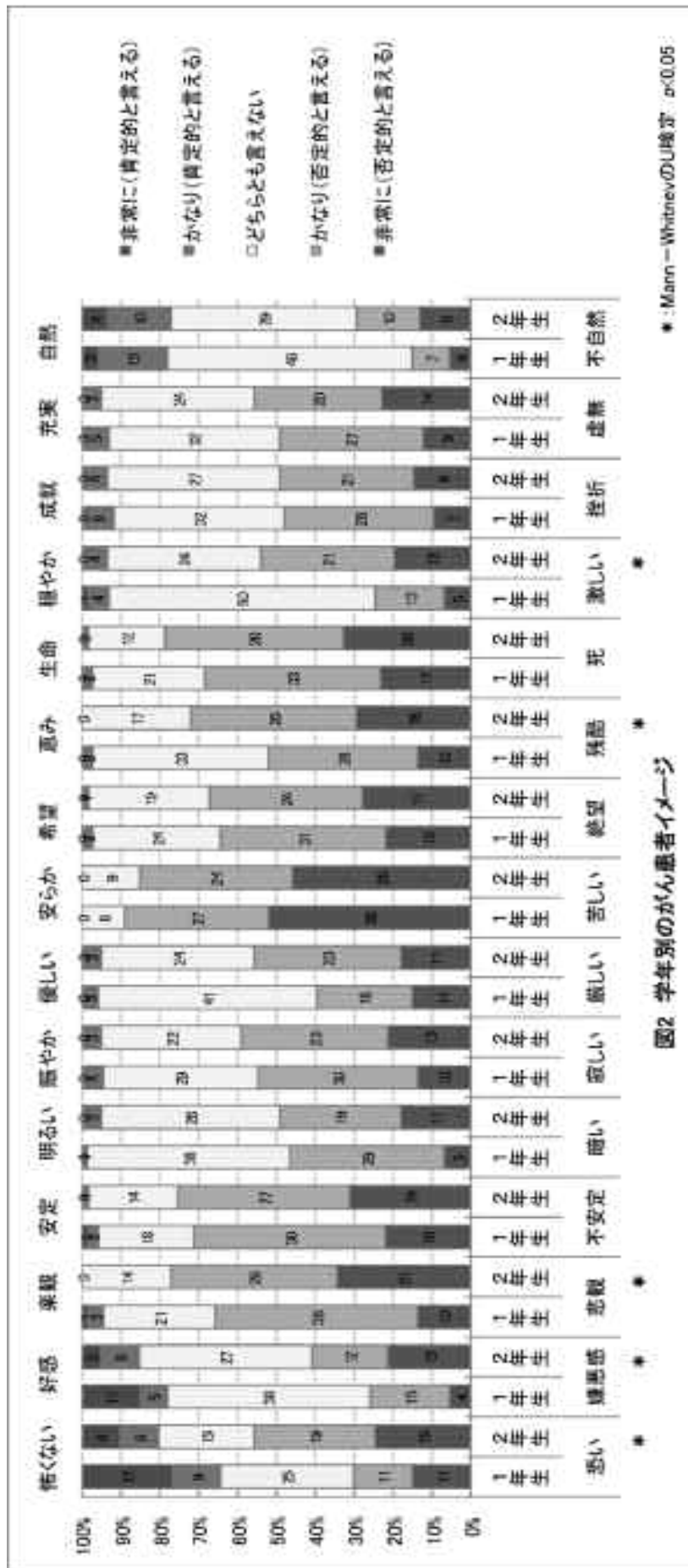


図2 学年別のがん患者イメージ